

インドシナ焼畑耕作民における狩猟信仰と狩猟儀礼

一 はじめに

世界の諸地域における狩猟に関する信仰と儀礼については、一連の重要な地域的研究によって、だんだんと明らかになって来つつあり、ことにアフリカ⁽¹⁾、ヨーロッパ⁽²⁾、コーカサス⁽³⁾、北方ユーラシア⁽⁴⁾、北米⁽⁵⁾、中米⁽⁶⁾、南米⁽⁷⁾については、すでに、すぐれた総括が行なわれている。ところが、東亞⁽⁸⁾、東南アジア、オセアニアについては、日本を除いては、まだまとまった地域的研究は現われていない。本稿の主な目的は、東南アジア大陸部に関して、この空隙をうめるために、資料の整理を行なうことである。

ここで、本論文で取扱われる地域と民族について、もう少し詳しく限定しておく必要がある。東南アジア大陸

大 林 太 良

部、ことにビルマ人、タイ人、ラオ族、カンボジャ人のような小乗仏教を信じている諸民族のところでは、殺生禁断の仏教倫理によって、狩猟自体が著しく不活潑であり、軽蔑された職業的狩人の活動すらもが、仏教による規制の下にある。たとえば、タイでは、毎月、一日、八日、十五日と二十四日には狩猟や漁撈することが禁止されており、これらの日には、誰もが肉を売買したり、食べたりすることも考えないのであった。⁽¹⁰⁾ こうしてみると、これら小乗仏教を信ずる高文化諸民族について、狩猟信仰や狩猟儀礼に関する報告が、タイの象狩のような例外を除いては、ほとんどないのも無理からぬところである。そこで、これら諸民族は、本論文の主な考察対象から除外しなくてはならない。

他方、採集狩猟民はどうであらうか？ インドシナにも、トキン⁽¹¹⁾の Tacui、中央ベトナムの May, Cuoi, Ruc、⁽¹²⁾それに東北タイの Phi Tong Luang (Mrabri) 又は Yumbri) のような採集狩猟民があり、⁽¹³⁾これら諸族は、ことによるとかつての Hoabinhian 乃至 Baosnian 的な中石器文化の伝統を引くものかも知れず、インドシナ民族・文化史上極めて重要な諸族ではあるが、まだ著しく資料が不足で、ことに狩猟信仰・儀礼についてはそれが甚だしい。他方、マラヤの Semang 族や Sakai 族については、より多くの資料があるが、これは Andaman 諸島やフィリピンのネグリート、スマトラの Veddoid 系採集狩猟民との関連において取りあつかうのがより適当と思われるので、ここでは一応除外する。

結局、考察の対象として残ったのは、東南アジア大陸部における山地の農耕民である。事実、西のアッサム、ビルマにおける Naga 諸族と Kuki-Chin 諸族、東のインドシナの Moi 諸族、Muong 族、Kha 諸族においては、狩猟もかなり盛んであり、また狩猟活動に伴う信仰や儀礼についての報告もかなり多い。ここでは紙数の関係から、東の群を主な考察の対象とすることにしよう。

二 南部の焼畑耕作民

インドシナ南部の焼畑耕作民は主として Mon-Khmer 諸族に属し、ベトナムにおいては一部は Indonesia 諸族に属している。以下、特に断っていない場合は、すべて Mon-Khmer 系である。

a Koui 族

カンボジャの Melou Préy (= Mlu Prei) の Koui⁽¹⁴⁾ (Kuy) 族においては、狩猟が重要な地位を占めている。小銃を用いて、鹿、野牛 *ansong* を狩り、生肉や乾した肉を食べ、皮を売ったり、塩と交換する。

老練な狩人は呪文を唱えて、精霊の助けを求め、あるいは精霊を祓い除ける。というのは、精霊には二種あるからだ。

- 一、*prakham*。つまり武器あるいは猟具の精霊であって、この加護を求め、好意をもってもらう必要がある。
- 二、敵意ある精霊、つまり *préai kangvéai* または *nerénh kangvéai* であって、妖精であり、野獣の守護者である。これらを瞞し、祓い除けねばならない。

動物を殺しても、すぐに運べないときは、飛節の臙を切り、死体の上に何本かの枝を置き、あるいは口の中に雷管の火薬の小箱、あるいは弾丸を入れるが、それは *prakabai* 諸精靈に獲物を守らせるためであって、こうすれば一日、二日、さらに腐敗するまで放置しても、虎やハゲタカのような野獣も人間も敢てこの獲物に触れないのである。また臙を切断するのは、狩人が狩の始めに当って、唱えた呪文の効力が失われて、動物が蘇生しても逃げられないようにするためである。獲物を運ぶのを手伝いに来た身内や近所の人達は諸 *prakabai* (ここでは、諸精靈の具現した物体を指す) を取りのけ、ついで動物を解体する。狩人が割前として貰わなければならぬのは、右肩、右股肉、右のヒレ肉、舌、心臓、胸前の低部、それに皮である。これは厳守され、そうでないと諸精靈は侮辱されたことになる。これを守らないと、別に死んだり病気になるわけではないが、以後失敗がつづくという。

preai (狩人) たちは、ある森に呪いをかけて、他のすべての者がそこで狩に成功するのを妨げることも知っている。このために、或る場所で何か一頭殺すと、彼等

は草の芽を何本か茎に結び合わせて呪文を唱え、「私はこの茎を結ぶのと同様に、他の狩人はここでは幸せではないように」とつけ加える。この呪いは、芽が結ばれている限り、火が草を焼き払わない限り、つづく。

これらの人達は、鹿や猪の狩人だけを尊敬し、決して象の狩人を尊敬しない。彼等はこう説明している。「象を殺すことは、小屋の下の鶏を殺すよりも難しくない。象は視力や聴覚がかなり弱いので、風下に行つて象から十五乃至二十米のところまで近づけば充分である。鹿や猪や野牛ではそうは行かない。もし象が襲つて来たら、象を阻止するための呪文もあるし、それから、ゆっくり撃てば良いのだから、ますます楽だ」。

Miu Prey の首府の北にある *Trepang Kai* の住民は、鹿、猪、虎などを畏でとる。すべての獲物の耳は、懸吊綱の精靈のものとなる。これら畏を始めて仕掛けたときから、住民は三角の盆を用意し、バナナの木の葉を三段に重ねて、三個の卵、白米、砂糖をつけた赤米を、野獣の守護精靈、つまり *preai kangveai* に対する悪賢しい供物として供える。そして、これら諸精靈にやつて来てこれら供物を味うように招くのである。彼等はこれ

ら精霊を呪文を用いて縛りつけ、また同じ準備をもって、新たな供え物をする。これは陥穽罾 (trappe) の懸吊綱の Prakhani 諸精霊に対する真剣なものであって、それからこの綱が熱狂的に引き上げられる⁽¹⁵⁾。

b Stiang 族

カンボジャ、ベトナム国境地方に住む Stiang 族では、生業において狩猟が重要な役割を果している。十九世紀末に Rosser は、「Stiang 族は、以前にはもっぱら彼等の狐の獲物と、イモ (Bataten)、野生バナナとホーレン草に似たさまざまな菜のような森産植物によって生きていた。フランス人宣教師たちの努力によって、彼等のところに稲作が導入され、さかんとなった」と報じている⁽¹⁶⁾。

彼等のもとの主導的な農耕形態である焼畑耕作が、比較的最近になってフランス人宣教師によって導入されたとは信じ難く、またそれを支持する他の資料もないので、おそらく、これは水稻耕作導入について述べているのであろう。それはともかくとして、彼等の生業において、狩猟と採集が極めて重要な役割を比較的近年まで果していたことが、これによっても窺える。

Stiang 族の居住地域は、「後印度半島で植物と動物のもっとも豊かな領域の一つであり」⁽¹⁷⁾、この高原のいたるところに、壮麗な常緑の高い森林がある。この森林地帯には、象、水牛、犀、虎、猪などが多数生息し、沼のあたりの地上は彼等の足跡でうずまわっている⁽¹⁸⁾。

Stiang 族は狩猟を好み、弩と毒矢で、象や虎の大規模な狩り立てを行ない、また鹿、ノロ鹿、水牛は主として待伏せして射るのである。彼等は、若象を飼いならすためよりも、むしろ象牙を目当てに象狩りをする。一番獲物が多いのは、雨期の始めの狩猟だ。このときは若草が萌え出て、鹿、ノロ鹿やその他の獵獣が森から草原に草を喰みに出てくるので大変都合よく獲物を仕止めることができる⁽¹⁹⁾。

狩猟の経済的重要性に対応して、狩猟に関する信仰と儀礼も顕著である。Moura によれば、すべての動物が靈魂を一つもっていると考えられており、生計のために動物を殺さねばならないときには、動物に陳謝する⁽²⁰⁾。同様に Moura もこう報告している。「彼等の信仰によれば、獣類もまた魂をもっていて、それは死後さまようものであると考えられている。そこで獣を殺すと、魂が仇を

(21) インドシナ焼畑耕作民における狩猟信仰と狩猟儀礼

するのを怖れて、罪亡しの意味で殺した獣の猛猛さ大きさに応じて供物をする。象に対する儀式は最も盛大で、この時には、象の頭を飾る冠が編まれる。タムタムや太鼓、歌声は七日間連続する。喇叭の音に村中が駆けつけてこの儀式に列席するが、各自その肉の一片にありつく⁽²¹⁾。この祝宴はまた、Schum-Schum 酒の酒宴にもなる⁽²²⁾。

また彼等が獵具として用いる弩に関しては、AZEKAR は、新たに弩が作られて、それを用いて獲物を一匹始めて殺す機会があると、この動物の毛と血を取って弩の先端を蔽う。これは《sona sa pai mat》⁽²³⁾（この武器は沢山の肉を食べる）という、と報じている。

c Moi 諸族

Moi 諸族のもとにおいても狩猟はかなり盛んである。さまざまな罟が使用されるほか、弩を用いての待伏せ獵も行なわれる⁽²⁴⁾。しかし、筆者が使用しえた資料は、狩猟儀礼・信仰については、極めて断片的である。

まず、どの部族か明示せず、単に Moi 族とのみ記している例から始めよう。Moi 族は、狩における成功を希望する場合、出発する前に彼の矢の一本で、我が身を刺

し、あるいは彼の網にかかった動物の苦闘に似た一連の屈曲運動を行なう。彼の行為を真似て、彼の獲物が容易に仕止められることは、彼は一瞬も疑わない⁽²⁵⁾。

ある種のコロギは、狩の成功を常に予言すると言われる。彼等に感謝するために、捕えた獣の或る毛（これらの毛は焼かれ、それから米酒がそれに注がれる）と、その鳴き声が前兆と考えられている鳥の或る毛を供える⁽²⁶⁾。

Ma 族

HARKAND は、Bien-Hoa 省の Donai 河とその支流 Song-be 河の中間に住む Moi 族について報告している。部族名は挙げられていないが、上記の地域の Moi 族なら Ma 族と見て差支えなからう⁽²⁷⁾。

彼等は悪霊の存在を信じており、あらゆる重要な行為に当っては、一種の贖罪供儀を行なう。たとえば、彼等は大きな目の野獸を一頭屠ったときには、必ず彼等の家の屋根に一束の竹片を掛けるが、その大きさは殺された動物の大きさに応じている。それに一束の木が縛りつけられているが、彼等の言によれば、これをもって悪霊が動物を煮ることが出来るようにしているわけだ。象の場合

には、一種の甕もつけ加わって、悪霊は、このような巨大な食事のあとで渴きを癒すことが出来る。そのほか、竹棒の一端を割って葉の袋の中にさし込み、その中で木炭片を燃やす。象一匹に対しては、このような棒を二本、鹿や猪なら一匹につき一本をしつらえる。このような棒が長い列をなして小屋の壁ぎわに立ち並び、その小屋の黒く燻された屋根は、上記の束や、ありとあらゆる頭蓋骨の列を備えているのである。⁽²⁸⁾

Rosser は Donai 河の東、安南山脈の西斜面、安南の Binh-Tuan 省と Binh-Tin 省の西、北緯七一度から七二度の間に住む Moi 族について報告している。⁽²⁹⁾ どの部族か同定するのに困難であるが、Le Bar 等の民族分布図では、Nop, Pru, Sop, Stre 等の諸族がこの地域に住んでいるが、⁽³⁰⁾ いずれも言語上 Ma 族と近い親縁関係にあるから、ここで取り扱うことにしよう。

さて、この Moi 族は、多家族家屋に住み、⁽³¹⁾ 稲の焼畑耕作と野生のイモの採集によって生活している。彼等は肉としては家豚のほかに、猿、猪、大トカゲ (Hydro-saurus Salvador)、それに祭のときには水牛の肉も食べる。狩猟にはあまり熱心ではないが、弩で毒矢を発射し

て獲物をとる。象や虎もこうしてとるが、象や虎の狩には全村が参加する。⁽³²⁾ Moi 族の考えによると、すべての動物は死後、目に見えない精霊として森の中で生きつづける。そこで Moi 族は、彼によって殺された虎や象などの靈魂を宥和するために、豚、鶏、あるいは土甕に Schun-Schun 酒 (米酒) を捧げる。各動物について記念の印を一つ小屋の屋根に掛けるが、象の場合に歯を一本、食用獣の場合は下顎骨である。このような動物から直接起源した象徴の代りに、竹を編んで作った奇妙なものを利用することもある。これは動物の種類によって形が異なっている。このような象徴の前に酒甕が置かれ、その両脇には蠟燭がともされ、歌や祈禱や踊りから成る、あらゆる儀式が営まれる。そのあとで酒宴となり、女や子供も含めて全員がこれに加わる。⁽³³⁾

Muong 諸族

Muong 族と総称されている諸族には、さまざまな群が含まれている。最近の CONDOMINIAS の諸報告には、関係資料は残念ながら見当らず、ここではより古い Ma-Tra の資料による。

Mnong Pou-teung 族の B. Kseur は狩人の村であつて、狭い小屋の中には、象、犀、虎のトロフィー (dépo-niles)、鹿の角、孔雀やさまざまな鳥の羽が沢山ある。象と犀は、山の中に土人が掘った陥穽によって捕える。⁽³⁴⁾

Preng 族の B. Bon-Laych 村は、さまざまな動物のトロフィー (dépo-niles) をもっており、この住民が狩人であることを物語っている。猪や鹿の頭蓋骨は屋根の小梁に掛けられている。犀皮の破片や蹄や立派な一本の犀の鼻も同様である。犀の角は安南人商人に売られる。獵具としては弩と短槍がある。⁽³⁵⁾

Dar-lae Rhadé 族の近くに住む Prong-Mnong 族は昔から象狩と象の調教を行なっているが、飼象を売るようになったのは、新しいことであつて、それまでの奴隷貿易がフランス政府によって禁止されるようになってからのことである。それまでは自分達が必要とするだけしか捕えたり調教したりはしなかつた。

象を十頭捕えると、狩人は《大 pahams》つまり狩人頭になり、あまたの特権を有つ。彼等は狩への出発や、狩からの帰還の儀式を主宰する。狩または漁撈に出掛ける前の儀式は捕獲したり殺しに行く動物の精霊を宥和し、

あるいは殺すことを陳謝し、または、狩人あるいは漁人が狩猟や漁撈に成功することに関心をもっている他の諸精霊を宥和するためである。帰還の儀式は、諸精霊に感謝するためである。狩の間中、Prong の全部族は一定の戒律を守る。一定の禁制を破れば不幸を招くのである。⁽³⁶⁾

Reungao 族

Reungao 族については、その文化の若干の側面に関しては極めて詳細な K. EMLIN の報告があるが、全般的な民族誌的報告がないので、その狩猟の内容について知ることが出来ない。彼等のところでは、盟約 (alliance) の習俗があり、人間の間ばかりでなく精霊との間でも結ばれる。精霊が相手の場合には、夢の中で行なわれ、かつ動植物の精霊の場合には、その危難を助けなくてはならず、また食べることが禁ぜられている。この盟約の及ぶ範囲は当人の家族までである。松本信広氏は、「こういう習俗が真正のトーテミズムでない事は申すまでもないが、新大陸の個人トーテミズムなどと或程度まで相似たものではあるまいか」と論じている。⁽³⁷⁾

ところで、盟約の対象となる諸動物精霊のうち、竹鼠、

蛇、*muntjac, tragule* のように、主として豊作を保証するものがある一方、⁽³⁸⁾ 狩の成功を確保してくれる一連の動物精霊があり、みな猛獣であることが注目される。つまり虎と盟約を結べば、大獵獸の狩猟において幸運である。彼等の説明によれば、虎は彼の友人たちの勢子となつて、すべての動物を彼等の罠に向つて、あるいは彼等の弾丸の下へと狩り立ててくれるからである。⁽³⁹⁾ 虎との盟約となり近い関係にあるのは山猫 *cat* との盟約であつて、これも狩に幸運をもたらすが、小獵獸、つまり鳥、リス、鼠、森の鶏、トカゲ、蛇に關してのみである。さらに、この盟約を結ぶと、山猫のように、上手に罠や逆茂木 (*lancoetes*) にかからずすむし、また山猫は彼の友人の鶏や仔豚に触れない。⁽⁴⁰⁾ ジャコウネコとテンは山猫と同様、虎のイトコだつたし、山猫の場合と同様に、盟約は小動物の狩猟に幸運をもたらす。⁽⁴¹⁾ 山犬との盟約は虎の場合と同様、大獵獸の狩猟を成功させる。これと盟約を結んだ男は森の中で豹に襲われた時に一刀の下に斬りすてることが出来たといひ、山犬の盟友たちは森の中で、鹿や猪の遺体を山犬が彼等のためにとっておいてくれたの⁽⁴²⁾ にしばしば出会うといふ。

Sedang 族

ベトナムの Kontum の北西の高原に住む Sedang 族は焼畑耕作民であるが、彼等の狩猟については、筆者はまだ詳しい資料に接していない。しかし、DAVEReux の報告によれば、A Pia という《野獸の主》的な女性神がいて、ちょうど雷神 *tara* には人間に対しては味方の雷神と敵の雷神があると同様な関係に動物に対して立っている。罠にかかった動物は、何か悪いことをしたので罪として人間に与えられたものと考えられている。狩りとられた動物は A Pia から《奪われた》のであつて、⁽⁴³⁾ 供饗という《罰金》をそれに対して支払わなくてはならない。

Quinhon と Quan-Ngai の Moi 族

DURAND は Quinhon, Quan-Ngai 両省における Son-phong 制や若者宿をもつ Moi 族について報告しているが、どの部族を指しているのか明らかでない。家屋の入口の上には狩のトロフィーがある。鹿角、猪の牙、それに幼稚な *gris-gris* のコレクションがある。⁽⁴⁴⁾

de BARTHÉLEMY の報告によると、Quang-Ngai 市の

西方奥地の Tra-Vian の Dayak 族は、北方の Ké Bouc 河流域の Bouc や Bolo (後述) と同様に、家屋の中はリスの尾、さまざまの動物の頭で飾られており、供物かトロフィーである。この村ではみな、狩の獲物と、糯米、サツマイモ、manioc、野生のヤム芋で生活している。⁽⁴⁶⁾

Huê の南の Moi 族

前世紀末に de BARTHÉLEMY は、Huê の南と東、Quang Nam の西にあたる Song Ta Ca 河および Song Kon 河とその支流の Ké Bouc 河、に沿って旅行し、多くの Moi 族の部落を訪れた。部族名は明らかでないが、最近の民族分布図を参照すると、⁽⁴⁶⁾恐らく Paoh 族であろう。Bao-Rai 村では manioc、唐胡麻、サツマイモ、バナナを栽培し、畑を荒す猪をとるために罠がしかけられる。⁽⁴⁷⁾酋長の家には多数の鹿と猪の頭蓋骨があった。これらは罠でとった動物のものであって、このトロフィーを精霊に捧げ、新たな豊穡を乞うのである。⁽⁴⁸⁾Bolo 村は七―八軒の住家からなり、焼畑耕作を営んでいる。⁽⁴⁹⁾ (旅人の宿泊所のことであるが、ここでは若者宿乃至集合所のつもりかも知れない——大林)には、*conman*

の頭とリスの尾が沢山あった。⁽⁴⁹⁾

Katu 族

中部安南において、首狩を想わせる血狩を行なうので有名な Katu 族は焼畑耕作を行なうほか、罠や犬や弩を用いての狩猟を盛んに行なう。⁽⁵⁰⁾環状の村落の中央には若者宿 *gual* があるが、その内部は、聖なる動物たる水牛の頭蓋骨および森で狩られた野獣の頭蓋骨と尾、つまり鹿、野生山羊、ジャコウ鼠、リスの頭蓋骨、狐の尾、孔雀、雉、*argus* 雉の羽毛、巨嘴鳥の頭が壁を蔽っている。これらのトロフィーはみな、乱雑に掛けてあり、炉の煙で煤けている。*gual* ごとに二個から十個の炉があるが、必ず偶数である。Katu 族の信ずるところによると、動物は靈魂を一つもっており、これはその頭蓋骨が掛けられている若者宿のまわりに戻って来、こうして村のまわりに、その一族を惹き寄せるのである。報告者の *Lé Pihon* は、かつては若者宿の中に人間の頭蓋骨が掛けられていたのではないかと想像している。⁽⁵¹⁾

Jarai 族

筆者はいままで Mon-Khmer 系の Moi 諸族をほぼ西から東へ、さらに北へと追跡して来た。ここでまたやや南にもどって、Indonesia 語系の Jarai 族の場合を見ることにしよう。

Jarai 族も焼畑耕作民であるが、大人の男たちの娯楽は、馬に乗り槍をもって後インドでいちばん危険な野獸たる野牛を仕止めることか、それとも狐犬を連れて徒歩で虎を狩り立てることである。⁽⁶²⁾ BENNETZ の報告によると、虎狩に当っては、彼等は自分の槍に《力》を与えるために、その死体を槍で突き、また死体のまわりを荒々しく跳びはねて勝利の踊りを踊る。虎の死体を村に運びこむとき、女や子供たちが死せるジャングルの王を、からかうために出迎える。虎のひげと爪は重要な呪物と見なされている。⁽⁶³⁾ Jarai 族が虎の死体を槍で突いて、槍に《力》を与えるというのは、Katu 族の血狩に当って、人間の死体を何度も槍で突いて、槍先を血で染めるの⁽⁶⁴⁾を思い出させる。

三 ラオスの焼畑耕作民

ベトナム南部で主に焼畑耕作によって生活している未

開諸族が Moi と総称されているように、ラオスでは Kha と総称されている。しかし、Kha 諸族は一般に Moi 諸族、ことに Mon-Khmer 系の Moi 諸族と親縁の住民であり、両者の間には連続と流動的移行がある。

a Nha Heun 族

Boloven 高原南部の Khas Gnia Heun(Nha Heun) 族の家屋の入口の前には、丸太の上か、竹を高くしたものの上に猪と鹿の毛皮片と毛、有鱗動物と亀の殻、それに若干の米粒が載っている。HARMAND の解釈によれば、「恐らく森の精霊か、当該動物種の精霊への供犠である⁽⁶⁵⁾」。

b Alak 族

Boloven 高原の Ban Houei の Alak 族では、象狩に出発する直前に水牛が供犠される。その場所は村の集合所の前で、そこに建てられた供犠柱に水牛を縛りつけ、⁽⁶⁶⁾山刀で刺し殺すのである。

c Kha Muong Ben 族

Cammon 州の Nakay 県 Ban So Phénh 村の住民は、*Muong Ben* から来住したので *Kha Muong Ben* と自称しているが、言語から見て *Kha Bo* 族と同じ種族らしい。焼畑で稲やトモロコシを作るほか、狩猟も行なう。狩猟の前には、*tio ma h'ru* 精霊(村の精霊)に對して、四本の小壺の酒、一頭の豚、一羽の鶏を捧げる。この地方には野獸が多い。⁽⁶⁷⁾

d Lanet 族

ラオス北西部の Lanet 族は *Izkowitz* の調査を通じて、インドシナ焼畑稲作民の代表者として広く知られている。彼等の狩猟法は主に罾猟である。

罾をしかける前日に、万事が若者宿兼集会所 (*coag*) で準備される。まず禁忌印 (*taia*) が入口につけられて、他村の者や妊婦が集会所に入らないようにする。このような人が入ったりすると、動物がつかまらぬ。集会所で罾をつくる場合には、特別の炉のところに坐り、そこでだけ食事をしなくてはならない。また睡眠も集会所でとる。家族で生活し、妻と寝るのは良くない。罾をしかける日にも、集会所で眠らなくてはならない。罾をかけ

た翌日、二羽の雌鶏を殺して煮て、それを罾をかけた所にもって行く。竹製の二枚の供犠皿が罾の南と北に置かれる。罾一つごとに八種の品、各品八片が供えられる。それから鶏の残部をもつて集会所に帰り、そこでもう一晚泊る。

何かを捕えて、それをもつて帰ろうとするときには、供犠皿の上に供物がなされ、*mbrong pran*、つまり森の精霊に、「*mbrong pran*、この耳をとって食べろ、十字路で食べろ、発酵茶を食べろ、煙草をのめ、*areca* の実と *betel* の葉を噛め、お金を受けとれ」と祈る。この供犠は罾の近くの小径で行なわれる。獲物をもつて村に帰ろうとするときには、*sevoit* (竹筒) を途中打ち鳴らし、村の子供達が出迎える。竹筒を子供達に渡すと、子供はそれを打って、「*Ho……ho……ho……*」と叫ぶ。これは大きな動物が捕えられた時にだけ行なう。こうするのを動物の精霊が好むからとも、逆に竹筒の音が動物の精霊を追い払うのだともいう。

狩人たちが村に入るとき、「どの集会所に私はこの動物を運びこむことが出来るか？」と叫び、人びとは、「この集会所へ！」と叫んで答え、動物をそこに運びこ

む。それから集会所の戸が外され、一種の俎板として用いられる。獲物はその上に置かれ、頭は、それが捕えられた場所の方向に向ける。こうしないと同じ場所では別の動物が捕えられないからだ。それから首が切り落され、肉などを綺麗に取り去って、頭蓋骨を集会所の屋根の下に吊すが、その場所は、動物を捕えた罨に面する柱の間の場所である。正しく置かれないと、*mbông prân* が怒り、獲物を罨で捕えることができなくなってしまう。

狩から帰って獲物の頭蓋骨を掛ける時には、集会所にある村の太鼓が打たれ、そのとき *mbông prân* がやって来る。この精霊に四種の供犠が行なわれ、そのとき、罨のところで捧げなかった、獲物のもう一つの耳も捧げられる。

mbông prân は獵獣の頭蓋骨に住んでいる。頭が吊されるときには、この動物を殺した槍もそれに結びつけられるか、その隣りに固着される。新しい集会所が建てられると、古い槍は取り払われ、森の中に放りこまれる。動物の頭蓋骨は一種につき一つだけ保存される。古い頭蓋骨を新築の集会所に吊すためには、生卵一個とブランドイーを一瓶か半瓶必要とする。卵に穴を一つあけ、

中味を吹き出して煮、それから卵殻を角の間に置く。頭は竹の総と木製貨幣で飾られ、そのあとで、卵の煮た中味が頭蓋骨に塗りつけられ、全体にブランドイーがかけられる。そして「汝 (*mbông prân*) はここに留まなくてはならない。他処へ行つてはいけない」と言う。

小径から獵獣が姿を消したのを見ると、*mbông prân* つまり声の上に結び目を作り、そこにすぐあとで罨をかける。⁽⁵⁸⁾

IZKOWITZ は *Lamet* 族の諸村からの事例を挙げているが、「すべての動物を監視する」森の精霊ないし獵獣の精霊と、その座としての獵獣の頭蓋骨という基本的な表象において一致している。⁽⁵⁹⁾

IZKOWITZ が指摘しているように、野生植物の採集に關しては、殆んど儀礼がないのに反し、狩獵について発達しているのは、狩獵がより重要であり、かつより不安定な経済活動であるからであろう。彼の解釈によれば、狩獵のための供犠は、「ここに雌鶏がある、代りに獲物を呉れ」という原理に基づく一種の交換である。動物を捕えたとき、その場で動物の体の一部を森の精霊に返すのは、動物のより価値のある部分を返し、こうして精霊の生産力が減退しないようにする。狩獵における一種の精

神的な貯蔵手段である。これに対して頭蓋骨の保存は、さらに獲物を得るために、動物の最も重要な部分——森の精霊の座たる頭蓋骨——を支配する力を得るためである。IZIKOWITZ は、この解釈は推測であって、さらに实地調査や後印度諸族の比較研究によって検証されねばならないと論じている。また IZIKOWITZ は、頭蓋骨の保存は、祖先祭祀のための水牛の供犠に当っても行なわれること、また Lamet 族と親縁のビルマの Wa 族の首狩などとも比較し、これらに、エネルギーの座としての頭蓋骨の表象が共通していることを論じている。⁽⁶⁰⁾

四 総括

以上の資料から我々は、いくつかの点を指摘することができる。

一 まず気づく事實は、資料が極めて乏しいことである。このことは、インドシナ焼畑農耕民の文化に関する我々の知識の総量の貧困を反映していると同時に、一九世紀末の旅行記のもつ高い資料的価値を示している。ことに狩猟のように、多くの地方で過去百年間に不振となった分野に関しては、それが当てはまる。

二 部族によって、かなり差異はあるものの、いくつかの共通の特徴が見出される。これら共通点は、資料が殖えれば、もっと増加するであろうし、また文化史的に意味ある分布領域の確定も可能であろうが、いまは単なる共通要素の存在と諸要素の結びつきの傾向の指摘に満足せねばならない。

三 猟獣が靈魂をもっており、死後精霊になるといふ觀念は Steng, Ma (Rosser), Prong-Muong, Katu に見られる。Lamet の mbrong, pran は関係があるかも知れないが、ニュアンスが違い、《野獣の主》の性格を帯びている。

四 この表象と内容的にも密接な関係があり、かつほぼ一致した分布を示しているのは、動物の靈魂あるいは精霊を宥和し、それに謝罪する習俗である (Steng, Ma (Rosser, HARKAND), Prong-Muong)。

五 動物を支配する神格としての《野獣の主》の觀念は、本稿の資料に関する限り、上記二点とは異なった分布 (Kouli, Reungao, Sedang, Lamet) を示してゐる。Ma (HARKAND) 族、Prong-Muong 族、Paoh 族や Nha-Henn 族の場合も、《精霊》の性格記述が不十分である

が、この系列に入れてよいかも知れない。インドシナでは、その他ラオスの Thai 族にも野獣の主の観念がある⁽⁶¹⁾。アッサムにおいては広く分布している。

六 《野獣の主》表象と意味的にも適合性をもち、また分布上も上記諸族の一部 (Koui, Moi, Nha, Henu, Lamet) に見られるのは、獲物の身体の一部、ことに耳や毛を供犠する習俗である。Phong-Muong 族の《感謝の儀式》は具体的記述を欠くので明らかでないが、この系列に入るかも知れない。

七 同様に狩猟に出発する前の供犠も《野獣の主》表象と結びつく (Koui, Lamet)。また、いかなる神格に対してかは不明であるが、Alak 族の象狩の前の水牛供犠 Kha Muong Ben 族の狩の前の精霊への供犠は、おそらく、この系列の変種あるいは村の精霊の観念との接触による変容形態を示すものであろう。

八 動物の靈魂の系列、野獣の主の系列の双方に跨って広く分布しているのは、猟獣の頭蓋骨を保存する習俗である (Ma (HARMAND, ROSSER), Mnung Pou-Tung, Preng, Quinhon 及び Quan-Ngai の Moi, Davak, Paoch, Katu, Lamet)。Katu 族や Lamet 族では供犠された水

牛の頭蓋骨も保存される。またこの両族とことによると Paot 族においては、若者宿乃至集会所が頭蓋骨の保存場所であり、かつ狩猟と特に密接な関係をもっていることが注目される。猟獣の頭蓋骨の保存は、世界の他の諸地域にもしばしば見られる習俗であるが、インドシナの資料に関する限り、北方ユーラシアにおけるような《骨よりの再生》の観念は、まだ見つかっていない。

九 世界の農耕民文化(ことにアフリカ、インドネシア、メラネシア)に広く見られる、死者の精霊が狩の成否を左右するという観念は、東南アジア大陸部では Ao Naga⁽⁶³⁾ 族や、Kachin⁽⁶⁴⁾ 族に見られるが、インドシナでは、まだ明瞭な手がかりは知られていない。

一〇 Muong⁽⁶⁵⁾ 族のところで行なわれているような儀礼的狩猟——ことに農耕儀礼としての——は、インドシナの Mon-Khmer 系焼畑耕作民のところでは、まだ確認されていない。従って、この種の儀礼的狩猟を Austroasia 的焼畑耕作民文化に帰属させる RAHMANN の説⁽⁶⁶⁾は、インドシナに関しては証明されていない。

(1) FROBENIUS 1929; BAUMANN 1938, 1950; LAGERCRANTZ 1954

(31) インドシナ焼畑耕作民における狩猟信仰と狩猟儀礼

- (2) SCHMIDT 1952
 (3) DIRK 1925
 (4) HOLMBERG 1925; HALLOWELL 1926; FRIEDRICH 1941, 1943; LOT-FALCK 1953; PAULSON 1961, 1963
 (5) HULTKRANTZ 1961; PAULSON 1959
 (6) HAERTEL 1959, ZERRIES 1959
 (7) ZERRIES 1954
 (8) NAUMANN 1963—64; 堀田, 1966; 千葉, 1969
 (9) SCOTT 1921: 217
 (10) BRUGIERE 1831: 187—190 (FRAZER 1939: 14 所引), なお CABATON 1920: Siam 485 は 8 日と 15 日のみ挙げる
 (11) GUIGNARD 1911
 (12) CUISINIER 1948: 39, 44—45, 155, 562
 (13) BERNATZIK 1941; FRAISSE 1949; NIMMADAHAR-MINDA 1952; BOELDES 1963; FLATZ 1963, 1964; VEDDER 1963, 1964
 (14) AYMONIER 1885: 17
 (15) AYMONIER 1885: 23—25
 (16) ROSSET 1896: 127
 (17) ROSSET 1896: 129
 (18) MOUHOI 1868 (訳, 155)
 (19) ROSSET 1896: 129, なお Stieng 族の狩猟技術 (鹿もふくむ) の詳細については, AZEMAR 1886 (DAM Bo 1950: 990—992 所引) を参照せよ
- (20) Mouira 1883, I: 422
 (21) MOUHOI 1868 (訳, 163)
 (22) ROSSET 1896: 129
 (23) AZEMAR 1886 (DAM Bo 1950: 991)
 (24) MAITRE 1909: 109—111, 151—155; BAUDRESSON 1919: 28—51
 (25) BAUDRESSON 1919: 100
 (26) CABATON 1914: 230
 (27) DAM Bo 1950: Pl. V (p. 960), Pl. VI (p. 971) の分布図参照
 (28) HARMAND 1877: 288
 (29) ROSSET 1896: 117
 (30) Le BAR et al 1964, 巻末付図
 (31) ROSSET 1896: 117, 121
 (32) ROSSET 1896: 121—122
 (33) ROSSET 1896: 119—120
 (34) MAITRE 1909: 325
 (35) MAITRE 1912: 170
 (36) CUISINIER 1927: 127
 (37) 松本, 1942, 26
 (38) KEMLIN 1917: 95—96, 99, 101—102
 (39) KEMLIN 1917: 90
 (40) KEMLIN 1917: 91
 (41) KEMLIN 1917: 92

- (42) KEMLIN 1917: 93—94
 - (43) Le BAR et al 1964: 149
 - (44) DURAND 1904: 1160
 - (45) de BARTHÉLEMY 1904: 92
 - (46) Le BAR et al 1964 卷末付図
 - (47) de BARTHÉLEMY 1904: 36
 - (48) de BARTHÉLEMY 1904: 37
 - (49) de BARTHÉLEMY 1904: 47
 - (50) Le PICHON 1938: 367
 - (51) Le PICHON 1938: 371
 - (52) BERNATZIK 1941: 229 (訳, 263)
 - (53) BERNATZIK 1941: 232—233 (訳, 267—8)
 - (54) Le PICHON 1938: 393 参照
 - (55) HARMAND 1879: 294
 - (56) NORDEN 1931: 82—83, Pls. facing 82
 - (57) FRAISSE 1950: 342—343
 - (58) IZIKOWITZ 1951: 195—197
 - (59) IZIKOWITZ 1951: 197—199
 - (60) IZIKOWITZ 1951: 333—335 なお東南アジアにおける動物の頭蓋骨と人間の頭蓋骨との間の概念上や習俗上の密接な関係は、すでに HEINE-GERDNER (1923: 933) も指摘している
 - (61) BOURLER 1907: 619
 - (62) FRIEDRICH 1943 参照
 - (63) SMITH 1925: 43—45, 87
 - (64) WENIG 1901: 46—47, 55
 - (65) CUSINIER 1948: 147—148, 529—530
 - (66) RAHMANN 1952
- 引用文献 (*印は間接に引用したもの)
- AYMONIER, Etienne. 1885. Notes sur le Laos. Saigon
 - AZÉMAR, H. 1886. Les Stiengs de Brolam. Excursions et Reconnaissances 1886: 147—160, 215—250*
 - de BARTHÉLEMY, P. 1904. Au Pays Mof. Paris
 - Baudesson, Henri. 1919. Indochina and Its Primitive People. London
 - BAUMANN, Hermann. 1938. Afrikanische Wild- und Buschgeister. in: Zeitschrift für Ethnologie 70: 208—239
 - 1950. Nyama, die Rachemacht. Über einige man-artige Vorstellungen in Afrika. in: Paideuma IV: 191—230
 - BERNATZIK, Hugo Adolf. 1941. Die Geister der gelben Blätter. Forschungsreisen in Hinterindien. Leipzig
 - ルネツヤーク著、大林太良訳『黄色い葉の精霊』(東洋文庫 108) 東京
 - Boerles, J. J. 1963. Second Expedition to the Mrabri of Northern Thailand. in: Journal of the Siam Society 51, Pt. 2: 133—160

- BOURLET, Antoine. 1907. Les Thây. in: *Anthropos* II: 355—373, 613—632, 921—932
- BRUGIERE, 1831. Lettre de Mgr. Brugière, évêque de Capse, à M. Bousquet, vicaire-général d'Aire. in: *Annales de la Propagation de la Foi*. V*
- CABATON, Antoine. 1914. Indo-China (Savage Races), in: *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, ed. by J. Hastings, VII: 225—232. Edinburgh
- 1920. Siam. in: *Encyclopaedia of Religion and Ethics* XI: 480—488
- 千葉徳爾, 1969 『狩猟伝承研究』 東京
- CUISINIER, Jeanne. 1927. Au Darlac. Institutions et état social. in: *Revue des Arts Asiatiques* 4: 120—129
- 1948. Les Muong: Géographie humaine et sociologie. Paris
- DAM BO. 1950. Les populations montagnardes du Sud-Indochinois (Péninsins). in: *France-Asie*. no. 49—50
- DIRK, Adolf. 1925. Der kaukasische Wild- und Jagdgott. in: *Anthropos* 20: 139—147 (Nachträge und Anmerkungen: 1127)
- DURAND, E. M. 1907. Les Mois du Son-phong. in: *Revue Indochinoise* (août 1907): 1055—1068, 1158—1171
- Flartz, Gebhard 1963. The Mrabri. in: *Journal of the Siam Society* 51. Pt. 2: 161—177
- 1964. Die Geister der gelben Blätter. in: *Zeitschrift für Ethnologie* 89: 24—34
- FRAISSER, André. 1949. Les sauvages de la Nom-om. in: *Bulletin de la Société des Etudes Indochinoises de Saigon*, n. s. 24, no. 1: 27—36
- 1950. Les tribus Sek et Kha de la province Cammon. in: *Bulletin de la Société des Etudes Indochinoises de Saigon*, n. s. 25: 333—348
- FRAZER, J. G. 1939. *Anthologia*. *Anthropologia*. The Native Races of Asia and Europe. London
- FRAEDRICH, Adolf. 1941. Die Forschung über das frühzeitliche Jägerturn. in: *Paidonma* II: 20—43 (weiterabgedruckt in: C. A. Schwarz, hrsg. v., *Religions-Ethnologie*: 196—218. Frankfurt an Main 1964)
- 1943. Knochen und Skelett in der Vorstellungswelt Nordasiens. in: *Wiener Beiträge zur Kulturgeschichte und Linguistik* 5: 189—247
- FROBENIUS, Leo. 1929. *Erlebte Erdteile VII*. Monumenta Terrarum. Frankfurt am Main
- GURNAKD, Theodore. 1911. Note sur une peuplade des montagnes du Quang-binh: les Tac-qui. in: *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient* 11: 201—205
- HAECKER, Josef. 1959. Der "Herr der Tiere" im Glauben der Indianer Mesomerikas, in: *Amerikanistische*

Miszellen (Mittellungen aus dem Museum für Völkerkunde in Hamburg XXV) : 60—69

HALLOWELL, A. Irving. 1926. Bear Ceremonialism in the Northern Hemisphere. in : American Anthropologist XXVIII : 1—175

HARMAND, Jules. 1877. Dr. Hartmand in Cambodja und Unter-Laos. in : Globus 31 ; 286—287

—1879—1880. Im Innern von Hinterindien. in : Globus 36 : 257—263, 273—279, 289—295, 305—311 ; 38 : 177—183, 193—198, 209—215, 225—231, 241—247, 257—263

HEINE-GELDERN, Robert. 1923. Südostasien. in : Illustrierte Völkerkunde, hrsg. v. G. BUSCHMAN, II : 689—968. Stuttgart

HOLMBERG, Uno. 1925. Über die Jagdriten der nördlichen Völkern Asiens und Europas, in : Journal de la Société Finno-Ougrienne, 41

堀田吉雄, 1966 『山の神信仰の研究』 桑名

HULTKRANTZ, Aake. 1961. The Owner of Animals in the Religion of the North American Indians. Some General Remarks. in : HULTKRANTZ(ed.), The Super-natural Owners of Nature (Stockholm Studies in Comparative Religion I) : 53—64. Stockholm

IZIKOWITZ, Karl Gustav. 1951. Lamet, Hill Peasants in French Indochina. Ethnologiska Studier XVII. Göt-

borg

KEMLIN, R. P. 1917. Les alliances chez les Reungao. in : Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient, 17 : 1—119

LAGERCRANTZ, Sture. 1954. Hunting Trophies and Hunting Magic. in : Anthropos 49 : 164—181

LE BAR, F. M., HICKER, G. C., MUSGRAVE, J. K. 1964. Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia. New Haven

LE POHON, J. 1938. Les chasseurs de sang. in : Bulletin des Amis du Vieux Hué, 25 : 357—409

Lor-Falck, Evelyn. 1953. Les rites de chasse chez les peuples sibériens. Paris

MATRÉ, Henri. 1909. Les régions Moï du Sud-Indochinoise : Le plateau de Darlac. Paris

—1912. Les jungles Moï. Paris
松本信広, 1942 『印度支那の民族と文化』 東京

MOUROT, H. 1868. Voyage dans les royaumes de Siam, de Cambodge, de Laos et autres parties centrales de l'Indo-Chine. Paris* ムオー著, 大岩誠訳 『タイ・カンボジマ・ラオス諸王国通歴記』 東京, 1942

MOURA, J. 1883. Le Royaume du Cambodge. 2 tomes. Paris

NAUMANN, Nelly. 1963—1964. Yama no kami—die japanische Berggöttheit. in : Asian Folklore Studies, 22 :

- 133—366; 23: 48—199
- НИМАДАНЭМИНДА, Краиси. 1962. Expedition to the "Khon Pa". in: *Journal of the Siam Society*, 50: 165—186
- 1963. The Mrabri Language. in: *Journal of the Siam Society*, 51: 179—183
- NORDEN, Hermann. 1931. A Wanderer in Indo-China. London
- PAULSON, Ivar. 1959. Zur Aufbewahrung der Tierknochen im nördlichen Nordamerikas. in: *Amerikanistische Miscellen* (Mittelungen aus dem Museum für Völkerkunde in Hamburg XXV): 182—188
- 1963. Zur Aufbewahrung der Tierknochen im Jagdritual der nordurassischen Völker. in: *Glaubenswelt und Folklore der sibirischen Völker*, hrsg. v. V. Droszger: 483—490. Budapest
- 1961. Schutzgeister und Gottheiten des Wildes (der Jagdtiere und Fische) in Nordurassien. Eine religionsethnographische und religionsphänomenologische Untersuchungen jägerischer Glaubensvorstellungen. (Stockholm Studies in Comparative Religion, 2). Stockholm
- RAHMANN, Rudolf. 1952. The ritual Spring Hunt of Northeastern and Middle India, in: *Anthropos*, 47: 871—890
- ROSSER, C. W., 1896. Die hinterindischen Volksstämme. in: *Mitteilung der Geographischen Gesellschaft in Wien*, 39: 113—139
- SCHMIDT, Leopold. 1952. Der "Herr der Tiere" in einigen Sagenlandschaften Europas und Asiens. in: *Anthropos*, 47: 509—538
- SCOTT, James G., 1921. Burma: A Handbook of Practical Information. 3 rd rev. ed., London
- SMITH, William C., 1925. The Ao Naga Tribe of Assam. London
- VELDER, Christian. 1963. Note: A Description of the Mrabri Camp. in: *Journal of the Siam Society*, 51: 185—188
- 1964. Die Geister der Gelben Blätter—ein Urvolk Thailands? in: *Zeitschrift für Ethnologie*, 89: 10—23
- WENIGL, Hans J., 1904. Beitrag zur Ethnologie der Chingpaw (Kachin) von Ober-Burma. Internationales Archiv für Ethnographie 16, Supplement
- ZERRER, Otto. 1954. Wild- und Buschgeister in Südamerika. Studien zur Kulturkunde 11. Wiesbaden
- 1959. Wildgeister und Jagdritual in Zentralamerika. in: *Amerikanistische Miscellen* (Mittelungen aus dem Museum für Völkerkunde in Hamburg, XXV): 144—150